

覚一本『平家物語』における運命意識

一因果的世界から運命意識へ一

呉起燻*

(e-mail: okh5640@hanmail.net)

目 次

1. 序論
 2. 因果的世界
 3. 運命意識の台頭
 4. 二重の運命意識
 5. 結論
-
-

1. 序論

『平家物語』という作品は、周知の通り、平清盛の父忠盛が昇殿を許された「殿上闈討」(巻第一)に始まり、平氏一門の栄枯盛衰を主題として描いたものである。特に、序章に、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす(以下省略)」と予告され、『平家物語』全編につらぬく原理的世界観は無常観であるといって、戦前のほとんどの諸研究は無常の文学という観点に基づいて行われたのである。そうしたなかで富倉徳次郎氏、小林秀雄氏などは無常観への通説から修正する研究方向を提示した。1)こうした研究方向の転換の可能性は、戦後の『平家物語』研究に大きく投影され、それまでの固定観念であった無常観から離れた、作品における思想性

* 清安대학교 문화관광과

1) 富倉徳次郎『日本戦記文学』弘文堂、1941. p.48-78 — 無常観は『平家物語』全編に張り巡らされているが、それは物語の抒情性をあらわすにすぎない、という無常観への通説を修正する見解を提出した。
小林秀雄『無常といふこと』創元社、1946. p.36-54 — この物語の「一種の哀調」が仏教思想によらず、叙事詩の純粹さからもたされるという見解を示した。

の研究に多大な進歩をもたらすことになる。その中、注目されるのが「運命観」による作品論を提示した石母田正氏の論である。

石母田正氏は、ヘーゲル美学の叙事詩論に影響され、物語の構造や、人物像の有する意味をきめ細かく分析した上で、

平家物語といえ、盛者必衰・会者定離の思想をのべた物語であるとかんがえられている。このことは一面では真実である。しかし、まるで無常観や、宿命論がありさえすれば平家物語ができるように錯覚されると、平家物語の他の側面、あるいはその本質がどこかに見失われてしまう。²⁾

と述べ、それまでの「無常文学」「仏教文学」という観点に基づいて展開されてきた『平家物語』の評価を一応肯定する立場をとりながら、新たな評価軸として提示したのが「運命」であった。これは当時の『平家物語』研究に非常に大きな反響を呼び起こし、また戦後の『平家物語』研究、特に作品に内在している精神意識への研究に多大な転機を与えた。

本稿では、その精神意識の中でも『平家物語』に見られる運命意識について考えてみることにしたい。『平家物語』の評価の際、古くから因果応報思想を持ち出すのは当然のようにされてきた。勿論、因果応報思想が文学作品に表れているのは『平家物語』のみならず、それ以前の時代の文学作品にもよく見られる傾向であった。平家物語時代以前、とりわけ平安朝の『源氏物語』、『伊勢物語』などの作品には、こうした傾向が著しく表れている。

それでは、『平家物語』に見られる因果応報観は平安朝の作品のそれを引き継いだ性向といえるだろうか。まず、この問題の解明のため、平安朝の『源氏物語』、『伊勢物語』などの作品に見られる因果応報観を考察した上で、『平家物語』の因果応報観の性向を究明していきたい。また、こうして究明された因果応報観は『平家物語』の運命意識において如何なる機能を有するのであろうか。その点を登場人物らの言動と『平家物語』の表現に着目して考察していきたい。

本稿は平家物語諸本の中でも覚一本における考察ということで、本文すべての引用は『平家物語』上・下（日本古典文学大系 岩波書店 1959. 2）による。

2) 石母田正『平家物語』岩波新書、1957. p.43

2. 因果的世界

本稿では、『平家物語』に見られる因果応報的な観念を究明するのが最終的な目的ではなく、運命に対する意識が物語のなかに如何に表れているのかを究明するのが主たる狙いである。しかし、『平家物語』における思想の問題を考えると、因果観は、すでに多くの先行研究者によって指摘されている³⁾

実際、『平家物語』の因果応報観は冒頭の部分に、

是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、楽もきはじめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所を知らざししかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。
(巻第一 祇園精舎) ⁴⁾

とあるのによってあきらかである。しかも物語の展開上においても、前半に清盛を中心とした平家の悪行が描かれ、後半にその結果としての平家の滅亡が描かれている構成のため、読者は物語を因果応報観で見ざるをえなくなるだろう。

では、因果応報観とは如何なる観念であろうか。その意味を「日本国語大事典」で見ると、「(1)原因と結果。一切の現象の原因と結果の法則。(2)前に行った業の報い。多く、前世における悪行の報い。また、悪行そのものについてもう」⁵⁾とあって、実際『平家物語』のなかで因果観と関連つけられる用語としては、果報(御果報)、宿業、宿世、宿縁、因縁、因果などがある。仏教の輪廻思想に基づいた因果応報的な観念が、すでに『平家物語』の時代以前、古くから人間や人生についての理解や解釈として信仰されていたのはあまりにも当然なことであろう。『平家物語』以前のいくつかの作品をみると、

愚痴の類は迷執を懐き、罪福を信け匪、深智の儔ハ内外を觀て、因果を信け恐る。

(日本靈異記) ⁶⁾

3) 門前真一「平家物語の主題と構成」『天理大学学报』第42輯、1963. 12、p.6-7 — 仏教思想に基づいた因果応報観と見なしている。

佐伯真一「平家物語の因果観」『日本文学』27、1983. 4、p.16-17 — 儒仏の論理に媒介された日常的・俗世間的認識に依拠した因果応報観という見解をみせる。

兵藤裕己「平家物語序章論」『日本文学』、1986. 1、p.21 — 平家物語を構成する意図的な原理は王権因果論であると説明している。

4) 日本古典文学大系『平家物語』上、岩波書店、p.19

5) 『日本国語大事典』第12巻、小学館、1981

6) 日本古典文学大系『日本靈異記』、岩波書店、1967、p.53

ただのわれらだに、人の悪しうするにはもはら死なぬわざなり。況やおぼろげの御果報にてこそ、人の言ひ思はんによらせ給はめ、真人達は、かくては天の責を蒙りなん。

(栄花物語上 卷第八 はつはな) 7)

ねびまざり給ふまゝに、人からも、世の思えも、様殊に物し給へば、宮の御心の、あまり頼もしげなき時ゝは、「思はずなりける、宿世かな。故姫君の、思し掟てしまゝにもあらで、かく、物思はしかるべき方にしも、かゝりそめけむよ」と、おぼす折ゝ多くなむ。

(源氏物語 浮舟) 8)

かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲しきこと、この男にほどされて。

(伊勢物語 六十五章) 9)

のように、因果観念に基づいた思考、発想は古くから行われていたのである。いや、それ以上『平家物語』時代以前に人生、人間における規範や現象などの判断の規準になるのは、全て因果律であったといっても過言ではなからう。人間の生老病死も栄枯盛衰も、全てが因果の律にかなったものとして判断され理解されていたのである。

因果観といえば、前に行った「因」(業)によってもたらされる「果」との関係結びつける観念であって、現世の境遇をただの偶然とは思わず、過去の行為における結果として見なす観念である。ここで過去というのは二つの時点に分けられるが、一つの時点はいま生きている時点ではない前世、もう一つは現世でありながら過ぎ去ってしまった時点である。いずれにせよ、因果観における過去の「業」をいうには何の差し支えもなからうが、因果的観念の受けとめる状況的情緒の側面からは大きな違いがみられる。

過去という時点からみたとき、『平家物語』以前はどちらかといえば、現世の果を前世の業因による果報として見なしていたようである。そして、そういう傾向が特に強く表れている時期が平安期と言えよう。つまり、平安期にはいと、当時の代表的な作品とも言い得る『伊勢物語』または『源氏物語』などに見られる主な観念には、「宿報」あるいは「宿世」的傾向が著しく強まっていて、その前の時代と比べて、こういう傾向は非常に目立つものであった。因果応報観においての、平安期のこういう傾向について、大野順一氏は次のように説いている。

平安期では、ひとの身のうえや境遇の変化のすべては、「宿世」として理解され判断される。宿世は因果であることにおいて、必然的である。それは決して運命とはいえない。運

7) 日本古典文学大系『栄花物語』上、岩波書店、1964、p.283

8) 日本古典文学大系『源氏物語』五、岩波書店、1963、p.203

9) 日本古典文学全集『伊勢物語』五、小学館、1975、p.188

命とはむしろ偶然である。そしてこの宿世は、平安期の人びとにとって、思想というよりも、いっそう情緒化された観念であった。10)

すなわち、おのれの今が前世における「因」、「業」によって定められている。という理解は確に仏教の輪廻信仰に基づいた観念で、この信仰は平安期になると、人々の観念の中には、信仰というよりは当然な道理として受け入れられるようになった、とってよからう。

それでは、『平家物語』にみられる因果観は如何なる機能を有するのであろうか。因果応報の観念と関連づけられる用語の例を本文から抽出してみると、「果報」（あるいは御果報）、「因果」、「宿業」、「宿世」、「宿縁」、「因縁」などであって、特にそのなかでも「業」による「果」、つまり、前の行為による結果を表すのに持ち出されるのは、「果報」、「宿業」の二つの用語であった。この二つの用語の数を本文から取り上げてみると、「果報」は八カ所、「宿業」は四カ所にのぼり、次のごとく記述されている。

○「果報」(御果報)の例

- A - あやまたぬ天台座主流罪に申おこなひ、果報やつきにけむ。 (上 p.156)
- B - 「只末代に生をうけて、かゝるうき目にあひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ」 (上 p.175)
- C - 「果報こそめでたうて、大臣の大將に至らめ」 (上 p.178)
- D - かやうに人のねがひもかなはず、民の果報もつたなき人間のさかひこそかなしけれ。 (上 p.388)
- E - 十善帝位の御果報、申すもなかなかをろかなり。 (下 p.337)
- F - 「五戒十善の御果報つきさせ給ふによって、今かゝる御目を御覧ずるにこそさぶらへ」 (下 p.432)
- G - 善見城の勝妙の楽、中間禪の高台の閣、又夢の裏の果報、幻の間のたのしみ、既に流転無窮也。 (下 p.434)
- H - あけてもくれても楽さかへし事、天上の果報も是には過じとこそおぼえさぶらひしか。 (下 p.436)

○「宿業」の例

- a - かゝるたつき人なれども、前世の宿業をばまぬかれ給はず。 (上 p.143)
- b - 「さればこれはいかなる宿業のうたてさぞ」との給ひて、 (下 p.259)
- c - たゝ先世の宿業こそ口惜候へ。 (下 318頁)
- d - いま又かゝる御目にあはせ給ふも、先世の宿業なり。 (下 p.369)

10)大野順一『死生観の誕生』、福武書店、1983. 9. p.78

これらの用語を、具体的に意味別で分けてみれば、

[A、F、G、H] - 前世の報いとしての幸運、しあわせの意。

[B、C] - 前世からの運の意。

[D、E] - 運の意。

[a、b、c、d] - 前世の行為の報いの意。

のごとく、「果報」「宿業」の用例の十二カ所のなか、単純に[運]という意味で使われている[D、E]を除いた十カ所は宿世的観念を表しているのがわかる。このような用例からみると、『平家物語』も平安期までの因果応報観の主流を成していた宿世観から脱してないように見えるが、物語の展開上からはやや異なる傾向が見いだされるのである。というのは、

『平家物語』における「果報」が、平安朝までのように、前世に行われた行為による宿報（宿世観）として見なされているかといえば、一方では現報として理解・解釈しようとする傾向が少なからず見られるからである。

実際、物語の内容には多くの登場人物の滅び去っていく有様が描かれていて、それを現世における罪悪の報いとして理解しようとする側面がよく見かけられる。それでは、この「現報」は具体的に物語のどのような内容をさすのか。まず、取り上げられるのは平家の滅びである。厳島神社を完成させた厚い信仰によって、清盛自身が太政大臣の位まであがるのをはじめ平家一門はこの上ない栄華を報いられる。しかし、「但悪行あらば、子孫まではかなふまじきぞ」（上 p.229）という大明神のお告げにもかかわらず、清盛は悪行を蓄積し、その報いとして平家はついに滅んでしまい、清盛自身も「あつち死」という形で最期を遂げる。特に、清盛の死は、奈良の大仏を焼いた罪によるのだという二位殿の夢の中で告げられることによって「現報」として受けとめられる。また注目したいのは西光法師親子の滅びについて、「是等はいふかひなき物の秀て、いろまじき事にいろひ、あやまたぬ天台座主流罪に申おこなひ、果報やつきにけむ、山王大師の神罰冥罰をたちどころにかうぶつて、かゝる目にあへりけり」（巻第二 西光被斬）という物語の解釈である。その他にも俊寛の滅びが取り上げられ、物語は俊寛の性格について「此俊寛も僧なれども、心もたけく、おごれる人にて」（上 p.125）と描いたり、鬼界が島とともに流されていた康頼、成経は熊野信仰に熱心であったが、俊寛は「天性不信第一の人」と説明した後、康頼、成経の二人は赦しを得て鬼界が島から脱することができたが、俊寛は一人だけ残され惨めな生をおくるのを、「僧都一期の間、身にもちるる処、大伽藍の寺物仏物にあらずと事なし。さればかの信施無の罪によって、今生に感ぜられけりとぞみえたりける」（上 p.236）と、俊寛の滅びをもって、現世に作った業により現世のうちに果を受ける、という「順現業」として説明している。

『平家物語』における様々な「果」を「順現業」として解釈・説明する傾向は、その前までの平安期の文学作品にはあまり見られない、かなり異なる傾向と言い得よう。勿論、平安期の文学作品に「順現業」的な観念がなかったわけではない。例えば、『源氏物

語』からその例を拾えば、主人公の光源氏は藤壺女御としてはならない禁忌の愛を交わすが、それが「業」になって、後で女三宮と柏木との密通事件という形で報いられるのである。『源氏物語』の「柏木」巻には、柏木との密通によって女三宮が男児を出産した消息を接して、人に顔をさらさない女児ならよかったのに、と揺れ動く光源氏の姿が描かれた後、次のように彼の言葉が記されている。

さても怪しや。『わが世とゝもに、おそろし』と思ひしことの報いなめり。この世に、かく、思ひかけぬ事にて、むかはりきぬれば、後の世の罪は、すこし軽むらんや。

(『源氏物語』 「柏木」)11)

柏木と女三宮との密通による出産は自分自身と藤壺との密通による冷泉院出生に対する報いであるとはっきり源氏は自覚したのである。これは確かに因果応報思想に根底をなす考え方であるものの、とりわけ「順現業」的な観念に発するのである。

しかし、このような「順現業」的な観念は『源氏物語』のなかでもごく一部分にしか見られず、やはり主流をなしているのは、「宿世」観であろう。それと比べて『平家物語』には、平安期の「宿世」観を引き入れながらも、先にも述べたように、一方ではいたるところに「果報」を「順現業」として説明しているのがうかがえる。

現在の境遇（果）を、平安期の作品である『源氏物語』などでは「宿世」として受けとめているのに、何故『平家物語』では「順現業」として見ようとする傾向が強かったのであろうか。その変異のわけは、各々の作品が描かれた時代状況によるのであろう。こうした点と関連して、藤井智海氏の見解をみると、

平安期中期以後、即ち末法の世に入ってから、保元、平治の乱など突発し、天災地変の続出殊に甚だしく、今まで平安だと信じ切っていた京の騒ぎは彼等にとっては天下の大乱となり、京の破壊は世界の滅亡となり、宮殿は兵火に焼かれ、殿上人の首が鴨の河原に曝され、さらに上皇までが流滴の身となられた。このように末法の時期に遭遇した平安期人士は人心恟々として有為転変、無常迅速の甚だしさに一大恐怖を感じ、物の哀れを嘆息せざるをえなかった。(中略)このような恐怖の観念と、物の哀れの思想とが更に合流して、遂に宿報説、運命的因果応報の思想とが生じて来る。12)

とあって、激変期に生きていた人々は受け入れがたい現実を、耐えきれない今の境遇を納得するため「宿報」、「宿命」として受け入れなくてはならなかったということである。

旧秩序が崩れ、その代わりの新秩序がまだ成り立っていない混沌期、しかも天災地変の

11) 日本古典文学大系『源氏物語』4、岩波書店、1962、p.19

12) 藤井智海「軍記文学における仏教観」『同朋文学』第14号、1981. 3、p.23-26

続出した不安の時期を生きていた人々に、理解を越えた現実を納得するためには、今までよりもっと「宿報」的な観念が強まるのは十分考えられる。ただ、あまりにも迅速に変わっていく激変期の人々は、それまでの観念であった「宿世」、「宿報」だけで納得できたのだろうか、という点には疑問がある。

つまり、当代における急騰・急落が少なかった静的な平安期では身の上・身の回りの境遇を前世の業によってもたされた結果、即ち「宿世」として理解し納得しようとしたのであろう。しかし、そういう静的な平安期とは違って、当代における急騰・急落があまりにも頻繁にみられ、目前のことも見当がつかない『平家物語』の時代には、その盛衰のわけを前世からもとめる必要もなかった。いや、当代のうち、盛っては衰え、衰えては盛る時代的狀況に対して「宿世」観だけでは十分納得いかなかったのであろう。平安期までのゆったりした「宿世」観だけでは納得のいかぬ境遇を、『平家物語』は「順現業」として理解し説明しようとしたのであろう。このように考えると、改めて『平家物語』の時代が末法思想の広まりの中での無常観が強まった時期であったのを思わずにはいられない。時代は「宿世」の観念の支配する状況から「無常観」の支配する状況へと確実に移っているのである。

3. 運命意識の台頭

今まで『平家物語』における因果的観念を見てきたが、確かに『平家物語』の因果的観念には、平安期までの主な観念である「宿世」観を引き継ぎながらも、他方では身の上の境遇・時代的狀況を「順現業」として解釈・判断しようとする傾向が著しく強まっていた。

「宿世」観にせよ、「順現業」にせよ、何れも各々の「業」によってもたされる「果」を背負って生き、またそれを肯定するしかないのであった。そこには偶然性はなく、当然なこととして帰結すべき必然性があった。つまり、今の世の、人間の境遇は偶然ではなく、前世あるいは現世の「業」によって定められた結果であった。石田端磨氏は『平家物語』の「医師問答」章にみられる、重盛の「天心」「定業」という運命と関わる発言に注目して次のように論じている。

そこに当然、前世の業因が善悪を伴う時、運命もまたこれによって異なった姿をとって現れることになる。いわば、運命は、善因善果、悪因悪果の理法に随って、その宿業にもよさされ、善業によるときは運命「開」け、悪業によるときは運命は「尽」きるのである。¹³⁾

13)石田端磨『日本古典文学と仏教』、筑摩書房、1988. 4. p.74

要するに、人々はすべての境遇を「因」による「果」として認識したのであった。その「果」は人間の力ではどうすることもできない、「因」によってもたされた「定業」であった。今の境遇を今の時点だけではなく、前世あるいは現世の去っていった時間とつなげて考えていたのである。すなわち、すべての境遇はすでに過去によって定められたということで、人々は運命という観念を生みだし、また運命という枠の中で自分の境遇・世の境遇を理解し納得しようとしたのである。今の境遇を自業自得なものとして受けとめる果報的運命意識はこのような考え方から生じたと考えられる。

しかし、『平家物語』は果報的運命意識だけに止まってはいない。つまり、『平家物語』のなかには平安期までの流れといっても過言ではない、自業自得として受けとめていた果報的運命意識とは異なる新たな運命意識が現れてくるのである。その例を本文から拾えば、新都の福原では不吉な怪異があれこれと起る中、源中納言雅頼に仕える青侍が政権が平氏から源頼朝に移り、さらに藤原氏へ移ることを暗示する神々の会議の夢をみる、という記事が挙げられる。

たとえば、大内の神祇官とおぼしきところに、束帯たゞしき上、たちあまたおはして、議定の様なる事のありしに、末座なる人の、平家のかたうどするとおぼしきを、その中よりおたてらる。かの青侍夢の心に、「あれはいかなる上にて在ますやらん」と、或老翁にとひたてまつれば、「厳島の大明神」とこたへ給ふ。其後座上にげたかげなる宿老の在ましけるが、
 「この日平家のあづかりたりつる節斗をば、今者伊豆国の流人頼朝にたぼうずる也」と仰られければ、其の御そばに猶宿老の在ましけるが、「其後者わが孫にもたび候へ」と仰らるゝといふ夢をみて、其を次第にとひたてまつる。「節斗を頼朝にたぼうとおほせられつるは八幡大菩薩、其後わが孫にもたび候へと仰られつるは春日大明神、かう申老翁は武内の大明神」と仰らるゝといふ夢を見て、云々
 (上 p.342-343)

右の本文の引用によると、神々の意思によって政権が移されるのであって、そこには全然人間の力が関与できないという絶対的な運命意識があった。つまり、定められた道を辿ってうごくしかない、先はすでに人間自分等の意志と関わりなしで決まっている、という絶対的な、逆らうことの出来ない運命意識を『平家物語』は表しているのであろう。

だが、ここにも、先述した果報的運命意識がないとはいえないだろう。平家の味方をしている厳島の大明神が追い出された後、八幡大菩薩と思われる「宿老」が、「この日平家のあづかりたりつる節斗をば、今者伊豆国の流人頼朝にたぼうずる也」といったのは、神々の決定によって、政権が移されるのを暗示しているのであり、またこの本文は物語の展開上、前からの清盛の悪行によって滅ぶはずの平氏一門というニュアンスを漂わせた後の叙述であるため、読者は当然、平氏から源氏に政権が移されるのを、清盛の悪行によってもたされた「報」として受けとめるだろう。したがって、これは『平家物語』の果報的

運命意識を裏付ける部分の一カ所といってよいだろう。しかし、春日大明神と思われる、もう一人の「宿老」の「其後者わが孫にもたび候へ」と語ったところは、先の場合とは違って、果報的意識とは必ずしも関わりのない話であるといえよう。なぜなら、春日大明神の語った「わが孫」というのは、この記事の後、作者が成頼を通して夢の解釈を加えさせるところでは藤原氏を称するのであるが、源氏から藤原氏に政権が移されるのは、因果律とは直接かかわりのない、歴史的必然と考えられるからに他ならない。つまり、歴史の流れを、『平家物語』は偶然的運命と見なしているということである。そこには果報的運命意識にみられる仏教の因果思想とは異なる、漠然たる力によって与えられた運命意識が潜在しているのが知られる。また、そこには人間の力ではどうすることもできない、因果的倫理観に基づいた認識では理解できない、カリスマ的なパワーがあって、それが人間の運命を決定していくという考え方の存在が認められなければならないだろう。人間の善悪、人間の意志は、そのパワーのはたらきに対しては何の意味も持たないのである。要するに、清盛一人の悪行によって一門全体が滅ぶ、という構成で始まった『平家物語』は、因果的運命意識と共に偶然的運命意識をもつことによって新しい世界を切り開くことになるといえるのである。この二つの運命意識はある面では、矛盾対立するところもあるだろう。因果観に基づいて運命を考えると、現在の境遇を説明するために、過去の「業」による「果」という論理を持ち出して正当化するが、『平家物語』にみられるもう一方の偶然的運命意識には、「因」や「業」が、「果」を生み出すという因果法則はどこにも見当たらない。「積善の家に余慶あり、積悪の門に余殃とさまる」(上 p.161)という記述が本文に見えるが、その因果観だけに止まらず、それを越える漠然たる力が人間を、世を、歴史を支配し、あやつるのであった。先祖の悪行によって、子孫が影響される、という発想自体が真の仏教思想とはなれた考えで、『平家物語』は因果・偶然、という両面の運命観を念頭においていたと言わなければならない。

4. 二重の運命意識

それでは、なぜ『平家物語』には、このように異なる性格の運命意識が示されなければならなかったのか。はっきり指摘することはできないが、一つだけ察せられるのは、個人における運命と集団における運命を読者に説明し納得させるため生じたのではないか、ということである。

既述の如く『平家物語』は、清盛の「あつち死」をはじめ、西光法師、俊寛、成親などの滅びは、いわゆる「順現業」といつている。また、西光父子の讒言をきいた後白河法皇は天台座主明雲を伊豆国に配流するが、これについて『平家物語』は「かゝるた

(ツ)とき人なれども、前世の宿業をばまぬかれ給はず」(上 p.143)と「宿世」の業として説明している。つまり、個人の運命は因果応報観に基づいて認識したのである。それは、平安期の輪廻思想を引き継いだ因果的運命意識で、彼らが集団の悪果の事態にあるとき、個人的にそれを受けるべき必然性を、前世・現世・来世での因と果の関連性に求めるのである。したがって、それは、個人的な観念によって生じるものであり、伝統的な意味での仏教の観念に由来するといえよう。

個人の持つ因果応報観において、人間の力にかなわぬ集団の悪果を受ける理想的な姿は、重盛を高く評価しているところにも示されるように、運命の滅びを悟ることによってそれに逆らうことなく、現世を生き、来世での極楽往生を願うのである。それが人間のすべての名利欲望をなげうった上での境地をさすのは言うまでもない。一方において『平家物語』は因果応報観の道義に全く反する人間、集団の運命から逃れようとする人間も、同時に何の非難も加えることなく描くことで、真の人間の姿として現世への執着を訴えるのである。

たとえば、福原落のときの平氏の家臣らが、宗盛を前にして、どこまでもついていくなどと異口同音に約束しておきながら(巻七 福原落)、一の谷の戦いで自分の命を危くすると、命からがら逃げ回ったり(巻九 坂落)、知盛がわが子をまでも見捨てて命からがら戦いの中から逃れた後、「より命はおしる物で候けると今こそ思ひしられて候へ。人々の思はれん心のうち共こそはづかしう候へ」(巻九 p.224)と語っているところからもわかるように、彼らは因果的運命の道義を知っていながらも立場が究極におちいると、その道義を忘れていたのである。『平家物語』が、こういう因果律を察知しながらも、運命の理に逆らっていく登場人物らの姿を描いたことに対して、

平家物語の作者は、後からかんがえれば、滅亡するほかなかったような運命にさからって、たたかい、逃げ、もがいたところの多くの人間に深い興味をもったのである。それを物語にしたことによって、彼は人間の営みが無意味なものとかんがえる思想とたたかっているといってもよい。(中略)平家の作者は、暗い運命観や無常観にとらわれているようにみえて、じつは内乱がくりひろげた人間の生き方の種々相、その悲劇と喜劇が面白くて仕方がなかったのであろう。14)

と石母田正氏は語っているように、『平家物語』は真の人間の不完全さが展開されることに非常に興味をもって物語ったと思えるのである。また、それこそ平家物語の魅力とも言い得るだろう。

巻第三の「無門」には「天性このおとゞは不思議の人にて、未来の事をもかねてさとり給けるにや」(上 p.245)とあるように、重盛が、他の登場人物が持たない予知力をもって

いて、平氏の滅びを平氏の悪行によるものであると因果応報観の立場から、いち早く見通している超人間的な人物として捉えているのが知られる。それは、重盛が清盛の行為を平氏の悪行につながると諫めているところにもうかがわれる(巻二 小教訓)が、そこでは個人の悪因悪果が取り上げられるのではなく、集団(平氏)としての悪因悪果が取り上げられているというべきである。

このような集団性をはらんだ因果応報観は、重盛以外の人物においてははたして如何に受けとめられたのか。その点、たとえば、鎌倉に送られた重衝が対面した頼朝に、奈良の寺を滅ぼしたことについて「以ての外罪業」と詰責されると、重衝は、

衆徒の悪行をしづめんが為にまかりむかって候し程に、不慮に伽藍滅亡に及候し事、力及ばぬ次第也。(中略)今又運つきぬれば、重衝とらはれてこれまでくだり候ぬ。

(巻第十 p.261)

と答えているが、平氏の悪因悪果を認めずに、伽藍滅亡の事実を偶然性に帰着せしめようと語っているのは注目されてよいであろう。しかも、重衝には捕まった自分の境遇を不可抵抗的な集団の運命の観点から理解しようとする傾向が強いというべきである。作者の集団に対する因果応報観の叙述とともに、因果応報観の個人に対する集団的な扱い方が認められるべきである。要するに、因果応報観の集団性とは、平氏の個人個人の行為、その時々におこる事件が、すべて平氏の集団的な悪因悪果と結ぶつけて描かれているということにほかならない。集団の悪果(滅び)のなかで嘆き悲しむ個人は(巻七 主上都落・維盛都落・忠度都落・経政都落、巻九 盛俊最期など、その描写が多い)、集団に対する因果応報観を実証する一分子的役割を課され、平氏の悪果の請け皿として描かれるという側面をもつと認めるべきである。

では、『平家物語』はひたすら平氏一門の滅亡を果報的運命として見なしていたのであろうか。一門の滅ぶべき運命を予見して自ら命を縮んだ重盛の死後、何の牽制もされなくなった清盛は法皇幽閉、遷都などの罪業を作り重ねるが、その結果、平氏に没落の必然性を与えることになる。こうした物語の構想は平氏一門の滅びを因果応報的な観念で説明しようとする作者の意図によるのである。したがって、没落寸前の平氏の人々が運命を自覚したとするなら、ほかならぬ果報的運命であるはずだった。たとえば、都落ちの際、大勢の家来を前にして、

積善の余慶家につき、積悪の余殃身に及ぶゆえに、神明にもはなたれ奉り、君にも捨られまいらせて、帝都をいで旅泊にたゞよふ上は、なんのたのみかあるべきなれ共、云々

(上 p.114)

と語るところにも示されたように、一門の今の境遇を自業自得、つまり「積悪」による報いとして認識していたのである。しかし、平氏のなかでも知盛、経正などは今の境遇を自業自得として認識していなかった。

『平家物語』には、「若不思議に運命ひらけて」という、運命意識にかかわるセリフが二人の登場人物によって語られている。そのセリフを発するのは、都落ちをする際の新中納言知盛と皇后宮の亮経正であって、都落ちの前、挨拶に参上して次のように語る。

一門運尽てけふ既に帝都を罷出候。うき世におもひのこす事とは、たゞ君の御名残ばかり也。(中略)けふより後、西海千里の波におもむいて、又いづれの日いづれの時帰りまいるべしとおほえぬこそ、口惜く候へ。
(上 p.105)

ここで経正は我が一門の都落ちを「運尽て」しまったからと思い、今の境遇は運命のはたらきによるのを自覚していた。そして、彼は右の言葉に継いで、「若不思議に運命ひらけて、又都へ立帰る事候はば」と語って、運命の可能性をすべては諦めていないのがわかる。続けて知盛の場合をみよう。都は焼け野原となり、迫ってくる源氏の軍勢を避けるため、平氏は「都落ち」を決断する。その際、京都の警護のため上京していた畠山重能・小山田有重・宇都宮朝綱の三人は平家の都落ちに先立って斬られるはずであったが、知盛は宗盛に次のように語って三人の処刑を止めさせる。

御運だにつきさせ給ひなば、これら百人千人が首をきらせ給ひたり共、世をとらせ給はん事難かるべし。故郷には妻子所従等いかに歎かなしみ候らん。若不思議に運命ひらけて、又都へたちかへらせ給はん時は、ありがたき御情でこそ候はんずれ。たゞ理をまげて本国へ返し遣さるべうや候らん。
(下 p.102)

このセリフを見ると、知盛も経正のように今の一門の境遇を運命のはたらきによることと受けとめているのがわかる。そういう面では、知盛、経正の運命に対する意識は、自分の病は定められた運命として治療を断った重盛の意識とはほぼ共通している。が、重盛の認識していた運命は取り戻すことのできない、果報的運命であったが、知盛と経正とが思っていた運命は回復の可能性が見込めるものであった。つまり、彼らは我が一門の今の境遇を、偶然におこった歴史的流れのひとつとして受けとめていたのである。ただ、望むのは我が一門を離れていく歴史の流れが、運命の偶然が改めて戻ってくることであった。先も言及したように、鎌倉に送られた重衝が頼朝に対面した際、平氏の悪因悪果を認めずに、「力及ばぬ次第也」と伽藍滅亡の事実を偶然性に帰着せしめようと語ったのも、同様の運命観から出たのである。つまり、彼らは我が一門の今の境遇を果報的運命としてではなく、偶然的運命として認識したのである。そこで作者は集団の運命を、因果応報観に基づいた「果」と見

なしながらも、それを越える偶然的・歴史的流れとして解釈し理化しようとしたのである。個人個人の運命は因果応報思想に律して考えても、集団の興亡の運命にかかわると、もはや因果応報とは離れた観念が生じるが、それこそ『平家物語』の集団に対する偶然的・歴史的運命観であろう。

初めて運命を歴史と関連づけて、「歴史的運命」として把握したのは大野順一氏である。

重盛の死も、また清盛の死もすべて運命が尽きたからであった。しかしその死が、平氏の滅亡を、ひいては源氏の興隆を予定しているとき、それは単に重盛個人、清盛個人の運命にとどまるものではなかった。運命はここで歴史と結合する。いわば「歴史的運命」Geschickとなる。重盛、清盛の死は歴史的運命としての滅びであり、歴史的運命としての流れであった。その背後には歴史との関連において歴史的運命の支配があった。¹⁵⁾

とあって、個人個人の運命が集団全体の運命と関わるときは、歴史性を示すのである。その歴史的運命観は、個人の境遇を考える時の因果的運命観とは違って、歴史という大きな川が定めなく流れていく境地をさすのである。

そして氏は、「いったい歴史というものは、偶然だとか個人的な恣意や欲望などによって作られるものではあるまい」¹⁶⁾とあって、歴史における偶然性を否定しているが、知盛の「若不思議に運命ひらけて」というセリフからも、忠度の「一門の運命はやつき候ぬ」といったセリフからも、歴史的運命の偶然性が感じられるのである。

また、知盛も忠度も同じ歴史的運命を自覚していたのである。ただ、歴史的運命の偶然が我が一門(平氏一門)から離れていくのを、忠度は自覚していたのである。そして、離れていく運命に逆らうのではなく、武士としての自尊を守るため、忠度は最後まで戦い続けたのである。我が一門の滅びを自覚しながらも最後まで戦い続けた忠度は、もはや都落ちの際、「浮世におもひをく」ことは諦めた。滅ぶはず一門の運命を予知できたから。それでも戦い続けた。それが武士たるものの運命であるから。同じ歴史的運命意識を持ちながらも、知盛は最後の決戦(鷄合壇浦合戦)まで運命の偶然に縋っていた。¹⁷⁾

最後の決戦にあたって「運命つきぬれば力およばず。されども名こそおしけれ。東国の物共によはけ見ゆな。いつのために命をばおしむべき」と、叫ぶ知盛をみると、勿論、彼にも、忠度のような武士の倫理を守ろうとする意志はあった。だが、知盛が最後まで奮戦したのは、運命の「不思議」(偶然)を期待していたからである。そして入水として最期を遂げる

15)大野順一『平家物語における死と運命』、創文社、1966. 12、p.46

16)石母田正、前掲書、p.47

17)知盛が阿波民部重能の変心を察知して、彼の首をはねることを宗盛に訴えた場面(上 p.330)をみると、知盛は最後まで運命の偶然性に縋っていたのがわかる。

前の、「見るべき程のことは見つ、今は自害せん」といった知盛の言葉には、はやくも忠度が読んでいた歴史の流れとしての運命、つまり歴史的運命の実体を見とどけた、ということであろう。

5. 結論

既成秩序が崩れてしまう、混沌とした時代が要請する人間の生き方を描くのに際して、『平家物語』は人間の限界を越える力、つまり、運命の存在を認めずにはいられなかった。勿論、『平家物語』全体をもつばら運命意識という要素を表すための作品と位置づけることはできない。ただ、作品の全編を通して運命意識は大きな支柱的役割を果たして、ほとんどの事件が運命的な観点から出発し、運命的な流れに乗じて展開され、最終的に運命的に結論付けられてしまうことがわかる。それでは、『平家物語』に見られる運命意識は如何なる性格であったか。

まず、考えなければならないのは、因果応報の思想の根底をなしている「果報」的運命意識である。これは『源氏物語』や『伊勢物語』などの平安朝の作品のなかで頻繁に出ている宿世観を引き継いだ、絶対的な運命意識であるが、『平家物語』の果報的運命意識は、平安朝のそれとはやや違う性向を見せている。つまり、『平家物語』においてそれは、物語の相当の部分で「現報」として認識されているのである。「宿報」にせよ、「現報」にせよ、いずれも仏教の輪廻思想を基盤とする因果的運命意識を示す点にはかわりはないものの、「但悪行あらば、子孫まではかなふまじきぞ」といった神のお告げがあったにもかかわらず、清盛の積んだ罪によって、平氏は滅ばなければならない、という構想を実現させるためには、作者は「現報」の論理を用いるしかなかった。つまり、個人の運命は果報的運命意識として説明しているわけである。それは、いうまでもなく輪廻思想を引き継いだ因果的運命意識であった。また、彼らが集団の悪果の事態に処せられたとき、それを受けなければならない性、前世・現世・来世での因と果の関連性に求めるのである。

しかし、実際に『平家物語』を読んでみると、こうした集団の運命は因果応報観だけに即して語られてはいない。18) 集団の運命は果報的運命観にのみよるのではなく、偶然的運命観によって説明されるのである。この偶然的運命は、「善」とか「悪」といった人間の

18) 巻第五「物怪之沙汰」には、源雅頼の侍が、今平家が預っている大將軍の節刀が平氏から源氏へ、源氏から藤原氏に渡される夢をみたという記事がある。その後、清盛が大明神から頂戴した銀の蛭巻をした小長刀がなくなったことについて、「平家日ごろは朝家の御かためにて、天下を守護せしかども、今者勅命にそむけば、節斗をもめしかへさるゝにや」と平家滅亡の原因を「今者勅命にそむけば」ということで説明する。確かに平家滅亡を因果律で説明しようとする作者の意図がうかがえるが、源氏から藤原氏に節刀が渡されることは果報的運命観では説明できない。

行動とは関わりのない自然的な流れであり、非人為的な観念である。要するに、それは「宿報」とか「現報」などの因果律とは全然関わりのない観念であって、この偶然的運命の前では人間の意志は何の意味も持つことができないのである。『平家物語』はこうした二つの運命意識を表し、それを背負っていく人間達の様々な姿を描いた。

因果律に基づいて一門の将来を見通し、自らの命を縮めた重盛を理想的な人間像として設定することによって、人間の望むべき完全さを『平家物語』は提示している。物語における重盛という人物像には文芸性は認めたいが、作者は自分の望む運命観の完全さを展開することには成功したのである。重盛が、父清盛の悪行を牽制しきれず、自ら幕を下ろしたのは運命の察知によるものであって、物語はここで、彼の死後、滅ばなければならない運命を背負っていく人間の様々な姿を予測させるのである。

実際、巻第七「主上都落」以降には、こうした運命を背負っていく人間の様々な姿が見える。たとえば、知盛のように、運命自体は自覚しながらも、運命の不可知性に縋って戦い続けた後、運命の実体を知り尽くして入水する人物がいるかと思えば、また滅ばざるを得ない運命を予測しながら最後まで戦いはたしてから壮烈な最期を遂げる忠度のように武士たる者の運命意識も見られる。

運命意識は『平家物語』の全編を通じて示され、そのまま作中人物の性格設定にまで波及され、多くの登場人物が、彼ら自身の境遇を運命的な観点でもって認識し把握しようとする性格を、作者によって賦与されているのである。こうした運命観を賦与された各々の人物のなかで、重盛は作者の運命観の代弁者というべき理想的な運命観の持ち主として浮彫りされて、彼が舞台を降りた後も、他の登場人物らの運命に対する姿と常に照らされる。しかし、作者は興味をもって描こうとしたのはその運命に対する不可知性の人間の諸相ではなからうか。

【参考文献】

- 富倉徳次郎(1941)『日本戦記文学』弘文堂、p.48-78
小林秀雄(1946)『無常といふこと』創元社、p.36-54
石母田正(1946)『中世的世界の形成』伊藤書店、p.52-71
永積安明(1956)『中世文学の展望』東京大学出版会、p.22-36
石母田正(1957)『平家物語』岩波新書、p.19-31
渥美かをる(1962)『平家物語の基礎的研究』三省堂、p.48-61
小林茂人(1962)『中世軍記物の研究』桜楓社、p.33-41
永積安明(1963)『中世文学の成立』岩波書店、p.23-55
鈴木則郎(1963)「平家物語における平宗盛の人間像」『文芸研究』45、
日本文芸研究会、p.68-69
門前真一(1963)「平家物語の主題と構成」『天理大学学報』第42輯、p.6-7
大野順一(1966)『平家物語の死と運命』創文社、p.12-17
永積安明(1969)『平家物語』有精堂、p.31-46
富倉徳次郎(1977)『平家物語-変革期の人間群像』日本放送出版協会、p.47-58
佐伯真一(1977)「平家物語の因果観的構想」『同志社国文学』12号、p.44-49
藤井智海(1981)「軍記文学における仏教観」『同朋文学』第14号、p.21-23
大野順一(1983)『死生観の誕生』福武書店、p.20-33
大隅和雄(1986)『愚管抄を読む』平凡社、p.37-39
兵藤裕己(1986)「平家物語序章論」『日本文学』31、p.18-22
石田端麿(1988)『日本古典文学と仏教』筑摩書房、p.45-51
山下宏明(1993)「平家物語-受容と変容」『あなたが読む平家物語』4、有精堂、p.17
福田豊彦(1994)「平家物語の歴史叙述」『あなたが読む平家物語』3、有精堂、p.12

要 旨

『平家物語』という作品は平氏一門の栄枯盛衰を主題として描いたものであって、その全編をつらぬく原理的世界観である無常観は、常識化され、そのため戦前のほとんどの『平家物語』諸研究は、「無常文学」という観点に基づいて行われたようである。

しかし、無常観を根底にして『平家物語』を読もうとすることから、新たな方向性を提示する研究などが出された。その中、新たな読み方の軸として具体的に提示されたのが「運命」であって、これが当時の『平家物語』研究に非常に大きな反響を呼び起こし、また戦後の『平家物語』研究に多大な転機を与えることになった。

既成秩序が崩れてしまう、混沌とした時代が要請する人間の生き方を描くのに際して、『平家物語』は人間の限界を越える力、つまり、運命の存在を認めずにはいられなかった。勿論、『平家物語』全体をもっぱら運命意識という要素を表すための作品と位置づけることはできない。ただ、作品の全編を通して運命意識は大きな支柱的役割を果たしていて、ほとんどの事件が運命的な観点から出発し、運命的な流れに乗じて展開され、最終的に運命的に結論付けられてしまうことがわかる。

では、『平家物語』に見られる運命意識は如何なる性格であったか。まず、因果応報の思想の根底をなしている「果報」的運命意識である。これは様々な平安朝の作品のなかで頻繁に出ている宿世観を引き継いだ、絶対的な運命意識であり、果報的な運命意識である。

『平家物語』はこのような因果応報観に基づいて、平氏一人一人個人の運命を一門の罪による「果」として考えても、集団の興亡の運命にかかわると、もはや「果報」的運命といった見方から離れて説明・解釈しようとした。それこそ集団に対する偶然的・歴史的運命観である。そうした偶然的・歴史的運命観を登場する人物らに様々な形で体験させ、語らせることで、作者は豊富な人物像を造型するに成功したのである。

キーワード：因果応報、果報、宿報、運命、偶然的運命観、
歴史的運命観、人物像

투 고 : 2011. 11. 30
1차 심사 : 2011. 12. 17
2차 심사 : 2012. 1. 7